

## 中国のポスト青年期高学歴独身女性の結婚意識

——北京のインタビュー調査を通して——

郭麗娟（お茶の水女子大学）

### 1. 研究の背景と目的

中国は1980年代以降、改革開放政策、大学入試制度の再開、一人っ子政策の実施などにより、経済、教育と家族構造が大きく変化した。鄧小平に提唱された「先富論」が都市と地方の格差を拡大させ、大学を卒業すれば良い職に就けるという学歴信仰が高まり、若者たちは進学・就職を機に都市部に流入するようになった。その中、1980年代以降生まれた一人っ子の女性たちは親世代が享受できなかった高等教育の恩恵を受けられるようになった。とりわけ、高等教育機関の多い北京や上海に、全国から優秀な女性人材が大学進学を機を流入し、大学を卒業後も、都市部にとどまり、仕事を通して経済的な自立と自己実現を得ようとしている。ところがこれらの高学歴女性たちは家父長制の影響の下、親や社会から、結婚して妻や母親になることも強く求められている。「上昇婚」や「同類婚」志向が強い中、彼女たちは理想の相手を見つけられないため、独身期間が長期化し、2000年代以降、30代前後になっても結婚していない人は「剩女」と呼ばれ、「残った女、誰ももらってくれない女」というマイナスな意味合いでメディアで捉えられるようになり、学術領域からも注目され始めた。

これらの高学歴独身女性たちをポスト青年期研究に位置付けてとらえることができる。ポスト青年期という新たなライフステージが高学歴化、未婚化、晩婚化とともに出現し、教育、職業、親子関係、結婚などの諸側面が相互依存的に連動しながら展開しているとされている。日本のポスト青年期研究では、若者と定位家族、特に親との関係性が移行に及ぼす影響が指摘されており（宮本・岩上・山田 1997；宮本 2004）、自立したくても親元から離れられず、親と同居し続ける若者が注目されている。一方、中国では、親は一人っ子世代の教育、就業、結婚、出産など、ライフコース全般に関わっているが、若者の移行を親子関係から考察する研究が少ない。

かつて「結婚」は、(ポスト)青年期から成人期への移行を特徴づける一連のイベントの中で、最後の重要なイベントとして位置づけられていた。しかし晩婚化傾向が進み、人びとの「結婚」に対する期待や意味づけも変化している。また、現在の中国では、妊娠・出産の際に労働領域における女性への差別問題や、また家庭役割がなお女性に偏っている現状がある。このような状況で、中国の高学歴独身女性たちは自身の結婚についてどのように考え、意味づけているのだろうか。

本報告は、北京に在住する高学歴独身女性へのインタビュー調査を通して、彼女たちの結婚の選択や意味づけにおいて、自身の職業キャリアや定位家族キャリアなど他のキャリアやライフイベントとどのように関連しているのかを明らかにすることを目的とする。その際に、中国社会の経済的・制度的背景、家族規範・ジェンダー規範との関連から考察を試みる。

### 2. 方法と対象

2021年6-8月、北京に在住する20-30代の高学歴独身女性19名を対象に、個別にオンラインで半構造化インタビュー調査を実施した。対象者の選定は、現地の知人を起点とするスノーボールサンプリングにより行った。調査内容を本人の了承を得て録音し、後に筆者自身で文字変換し日本語訳した。調査は1人1-2時間半であった。調査内容は、教育キャリア、職業キャリア、結婚意識、ジェンダー意識、親子関係、自立意識と戸籍などであった。

### 3. 分析

本報告では、対象者たちが結婚についてどのように語り、意味付けているのかについて、本人の職業キャリアや定位家族キャリアなど他のキャリアやライフイベントとの関連に注目して分析する。

キーワード：ポスト青年期、高学歴独身女性、結婚意識